

論文

日本語教育におけるパブリックスピーキング -21世紀に必要な学びの1つとして-

深澤のぞみ^{※1}

要 旨

本研究は、「ビブリオバトル」の活動が、人が21世紀を生きていくのに必要な学びの1つであるパブリックスピーキングの技能を伸ばすのに貢献しているかどうかを明らかにしようと分析したものである。ビブリオバトルというのは、参加者が書評スピーチを競う活動で、パブリックスピーキングの一ジャンルであるとみなされている。最近では大学での教育に、21世紀を生き抜くのに必要な21世紀型スキルの育成が強調され、大学における外国人留学生対象の日本語教育もこの例外ではなくなっている。分析の結果、ビブリオバトルの活動はこれらのスキルに多く関係することが明らかになり、パブリックスピーキングの教育は、21世紀に必要な学びの1つであることが示唆された。

【キーワード】 パブリックスピーキング、口頭コミュニケーション、ビブリオバトル、21世紀型スキル

I. はじめに

グローバル化の進む現代では、従来のままの言語教育の目的や方法では対応しきれなくなってきた。日本語教育もその例外ではなく、日本語を学ぶ日本語学習者(以下、学習者と略記)の姿は日本語教育が盛んになり始めた頃から大きく変化し、学習者のニーズも絶えず変化し続けている。

日本語教育の現場では、従来、口頭コミュニケーション能力の養成が重視されてきており、日本語教科書でも多く取り上げられている。深澤・ヒルマン小林(2011)は、口頭コミュニケーションを主に扱う日本語教科書を調査し、「スピーチ」「プレゼンテーション」「口頭発表」など多くの用語が異なる意味で用いられていることや、扱われて

いる口頭コミュニケーションは学術口頭発表が多く、ジャンルに偏りがあることが明らかにした上で、新しく受け入れが進むと考えられる高度人材向けなどの内容を検討すべきだと提案している。

さらに昨今では、詳細は後述するが、グローバルな「知識基盤社会」において変化が加速するだろうという予測に合わせて、教育内容を変えていかなければならないという考え方が世界的に主流となり、「キー・コンピテンシー」や「21世紀型スキル」など、新しい時代に生きるために必要な能力が示されるようになった。そしてこれが言語教育にも大きく影響を及ぼすようになっている。

本稿では、これまで日本語教育の現場でよく使われてきた口頭コミュニケーション活動を、パブリックスピーキング^{1E2}と総称し、上に述べた新しい時代に必要とされる能力の養成という視点でどのようにとらえることができるのかを検討する。そして、21世紀に必要な学びであることを検証する。

II. 現代社会とパブリックスピーキング

1. 知識基盤社会

平成17年中央教育審議会答申「我が国の高等教育将来像」^{1E3}によると、21世紀は新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として極めて重要な役割を果たす「知識基盤社会」(knowledge-based society)であるとしている。そして「知識基盤社会」の特徴として、知識はグローバルであること、知識の変化は日進月歩で、それに伴う技術革新も絶えず生まれていること、幅広い知識と柔軟な思考力が重要であること、さらに性別や年齢を問わず社会に参画することが求められること、が挙げられるとしている。つまり、知識基盤社会では、グローバル化や様々な変化に対応するために、単に情報を得るだけでは不十分であり、必要な知識や技能を習得し、それを駆使して自分自身で課題を発見し、解決していく力が大事だということになる。このような能力は具体的にどのようなものであるかを示したのが、キー・コンピテンシーや21世紀型スキル、などに含まれる内容である。以下、それぞれについて詳細を述べていく。

2. キー・コンピテンシー

キー・コンピテンシーの詳細を述べる前に、コンピテンシーという語について見てみる。コンピテンシーは、英語の competency であり、大きく言うと能力という意味である。松尾 (2015) によると、従来は読み書き能力であるリテラシーが重視されてきたが、グローバル化や高度デジタル化が進む21世紀は、単なる情報を持っているだけ

ではもはや対応しきれなくなってきたており、人間の認知能力や態度などを含む人間の全体的な能力を定義するコンピテンシーの概念に進んできたという。

キー・コンピテンシーという用語は、OECD (経済協力開発機構)²⁴が、グローバル化が進む21世紀を生きる人材に必要な能力を定義しようとするプロジェクト (DeSeCo: Definition and Selection of Competencies) で出し

た概念で、現代社会に最も必要な資質や能力がキー・コンピテンシーとして細かく概念化されることになったものである。キー・コンピテンシーは、「相互作用的に道具を用いる力」、「社会的に異質な集団で交流する力」、「自律的に活動する力」の3つからなり、さらにそれぞれのコンピテンシーに下位項目がある。図1は松尾 (2015) によるキー・コンピテンシーの概念図である。たとえば「相互作用的に道具を用いる力」では、下位項目として、言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる能力、知識や情報を相互作用的に用いる能力、技術を相互作用的に用いる能力、が挙げられている。つまり、現代社会に求められる能力は、個人が単に言語能力があるとか、知識や情報を多く持っているということだけでは十分ではなく、あくまでも他人との交流の中で相互作用的に用いて、社会的な活動として位置付けることが重要だと捉えられていることがわかる。

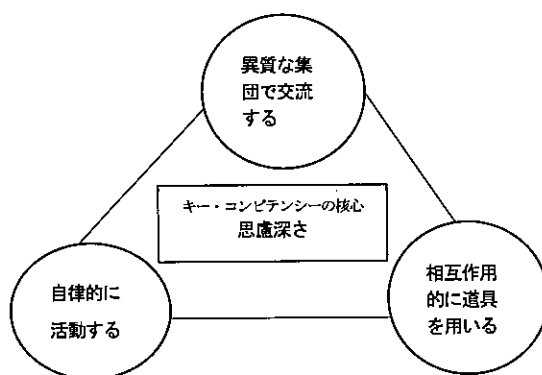


図1 キー・コンピテンシーの構造
松尾 (2015) を簡略化

3. 21世紀型スキル

キー・コンピテンシーと同様、現代に必要な能力として21世紀型スキルについても、よく取り上げられるようになってきている。21世紀型スキルは、グローバル化が急速に進む21世紀で働き、生き抜いていくために必要なスキルとして議論され始めた。つまり、これまでは1人の人がある専門に特化した技能を持てば、ずっとその技能を使いながら職務上のタスクをこなしていくことができたし、それで一生を終えることも可能であった。しかし21世紀では、これまで専門的な技能とされてきたことは新しい技術に取ってかわられることが増え、職務上必要とされるスキルは、ICT (Information and Communications Technology: 情報通信技術)²⁵を使いこなしながら、変化や進歩の多い状況に順応して知的な活動をしていくことだとされるようになった。グリフィン他

(2014)によると、この状況に対応するためにどのような教育が必要かという議論がアメリカの企業を中心に生まれ、21世紀型スキルを定義し評価法を開発していこうという動きにつながった。

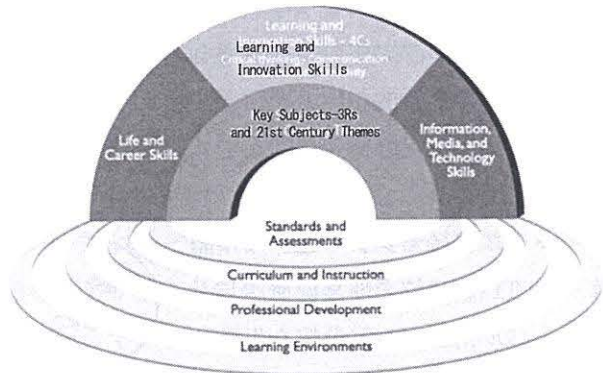


図2 21世紀型スキルの枠組み

出典：国際団体 P21 <http://www.atc21s.org/>

図2は、その際の21世紀型スキルの枠組みを示したものである(国際団体P21sウェブサイト)。

これによると、まず最も基礎となるのはキー教科の3Rs (reading, writing, arithmetic), そして学習とイノベーションスキル (Learning and Innovation Skills), 情報・メディアとテクノロジースキル (Information, Media, and Technology Skills), 生活とキャリアスキル (Life and Career Skills) の3つのスキルである。そして、下の部分にそれを支えるものとして、基準と評価、カリキュラムと指導、専門の開発、学習環境が挙げられている。

ここで注目すべきは、学習とイノベーションスキルに4c (Critical thinking, Communication, Collaboration, Creativity) が含まれるとあり、前節で述べたキー・コンピテンシーでも相互作用ということを強調しているように、コミュニケーションや協働を重視していることである。もはや知識や情報を単体で多く持っていることが重視されることはなく、それよりもコミュニケーションや協働が前面に打ち出されているのである。

4. 日本国内の動向

ここまでは、欧米を中心としたグローバル化の流れに対応した教育理念について述べてきたが、日本でも21世紀という時代を生き抜ける人材を養成するという観点から、新しい教育理念が提案されている。たとえば、文部科学省が2011年に、「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」を提案している。この提案では、前述したキー・コンピテンシーにも触れた上で、21世紀を生きる子どもには、子どもの多様性を尊重しながら、コミュニケーションを通じて協働し新たな価値を生み出す教育が重要だと結論づけている。

また新しい動きとしては、中央教育審議会が2016年5月に「個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在

り方について(答申)」を取りまとめ発表したことが挙げられる。ここでも、グローバル化の進む知識基盤社会である21世紀の日本社会に必要な人材を育成するために、グローバル化へや様々な変化への対応ができ、高度で実践的な専門力を持つこと、生涯にわたって学び続けられるような幅広い力の養成が必要であるとしている。またこの答申で特筆すべきことは、日本の今後の経済成長を支える人材として、外国人専門人材に焦点を当て、日本の高等教育の質の向上とともに、優秀な外国人専門人材の確保が必要だとしていることである。このことは、グローバルな教育の改革の流れに沿う形で日本の教育の改革が存在していることを表しているとともに、外国人に対する日本語教育も、この流れを強く意識すべきことも示している。これまでの日本語教育と異なることは何か、そして具体的に何を目指すのかを検討すべきだということになる。

5. 新しい教育理念とパブリックスピーキング

ここまで見てきたように、日本も含む全世界が、グローバル化が進む知識基盤社会の到来に直面し、教育の質を従来の内容から改革させなければならない、という動きは喫緊のものであることは疑いようがないことである。このことと、日本語教育、特に日本語教育が一貫して重視してきた口頭コミュニケーション教育とがどう関連するのかについて、検討してゆく。

これまでにアメリカを始めとした各国で開発された21世紀型スキルの種々の枠組みを検討し、さらに詳細にスキルの定義と評価法を検討しようという目的で設立されたのがATC21S (Assessment and Teaching of 21st Century Skills) という国際プロジェクトである。ATC21Sでは、これまでの既存の枠組みに記述されることがなかった、学習目標がどのようにして達成されるのかに焦点を当て、さらに詳細なスキルについて定義した。それがKSAVEモデルというものである。このモデルは4つのカテゴリーと10のスキルに定義されている(図3)。

<p>Ways of Thinking (思考の方法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①創造性とイノベーション ②批判的思考, 問題解決, 意思決定 ③学び方の学習, メタ認知 	<p>Tools for Working (働くためのツール)</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥情報リテラシー (ソース, 証拠, バイアスに関する研究を含む) ⑦ICT (情報伝達技術) リテラシー
<p>Ways of working (働く方法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ④コミュニケーション ⑤コラボレーション (チームワーク) 	<p>Ways of living in the World (世界の中で生きる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑧地域とグローバルのよい市民であること (シティズンシップ) ⑨人生とキャリア発達 ⑩個人の責任と社会的責任 (異文化理解と異文化適応力を含む)

図3 21世紀型スキル KSAVE モデル³⁶

そして、それぞれのスキルに、「知識」「技能」「態度・価値・倫理」という3つのカテゴリーが設定されている（グリフィン他（2014））。

たとえばこれらの10のスキルのうち、④のコミュニケーションを例にとると、表1のようにコミュニケーションに必要な知識、コミュニケーションのために実際に必要となる技能、そして、コミュニケーションに関係する実際の行動が示される。

表1 働く方法（コミュニケーション）^{※7}

知 識	技 能	態 度・ 価 値・ 倫 理
母語の能力 ・ 基礎的文法や語彙など ・ 話し言葉の様々なタイプ ・ 書き言葉 母語以外の言語の能力 ・ 基礎的文法や語彙など ・ コミュニケーションの非言語的な特徴 ・ 社会的、文化的側面などの多様性への気づき	母語と母語以外の言語能力 ・ 様々な場や目的において話し言葉や書き言葉によるコミュニケーションができる能力 ・ 様々な話し言葉を聞いて理解できる能力、簡潔で正確に話す能力 ・ 様々なジャンルや目的のテキストを読んで理解する能力 ・ 様々な目的のテキストを書く能力および書くプロセスをモニターできる能力 ・ 話し言葉であれ書き言葉であれ、他者の視点を取り入れて説得力を持つ議論をすることができる能力 ・ 書き言葉や話し言葉において複雑なテキストを理解したり産出したりするために必要な補助手段（ノート、図表、マップ）を使える能力	母語の能力 ・ 個人や文化の豊かさの潜在的な源であるにとらえ、母語に対する積極的な態度を伸ばす ・ 偏見なく他人の意見や議論に接し、建設的であつ批判的な対話に取り組む ・ 公の場で話す自信を持つ ・ 語や表現の正しさの技術を越えて、表現の美しさを目指す ・ 文学への愛情を伸ばす ・ 異文化コミュニケーションへの積極的な態度を伸ばす 母語以外の言語の能力 ・ 文化的差異とステレオタイプへの対抗に敏感になる

表1の内容とパブリックスピーキングの関連を検討してみると、次のようなことがわかる。まず、母語の能力だけでなく、母語以外の言語の能力の両方が求められていることが大きい特徴である。さらに、パブリックスピーキングに関連していることとして、話し言葉に様々な目的やジャンルがあると意識することや、説得力を持った言葉の使い方を求めていることがわかる。また、言葉以外のビジュアルエイドを用いることや、非言語行動への注目を挙げていることも、特筆すべきことであると考えられる。

表2 KSAVE モデルとパブリックスピーキング^{註8}

カテゴリー	スキル	項目 (下線は筆者による)
思考の方法	①創造性とイノベーション	[技能] 創造的に考える (創造的な活動を改善して最大限に高めるために、 <u>自分自身のアイデアを詳しく説明し、洗練し、分析し、評価できるようになる</u>) 他者と創造的に働く (他者に対して効果的に、 <u>新しいアイデアをつくったり、実行したり、伝えたりする</u>)
	③学び方の学習とメタ認知	[技能] 学習プロセスの中で、 <u>様々なマルチメディアでのメッセージを理解したりつくったり、口頭でのコミュニケーションを支える適切な方法 (イントネーション、ジェスチャー、模倣など) を使うことでコミュニケーションする能力</u>
働く方法	④コミュニケーション	[知識] 母語の能力 (<u>話し言葉に様々なタイプがあることを知る</u>) 母語以外の言語能力 (<u>非言語的機能を理解する。また、社会的あるいは文化的側面などにおける言語の多様性に気づく</u>) [技能] 母語と母語以外の言語能力 (様々な場や目的において <u>話し言葉や書き言葉によるコミュニケーションができる。様々な話し言葉を聞いて理解でき、簡潔で正確に話す。話し言葉であれ書き言葉であれ、他者の視点を取り入れて説得力を持つ議論をすることができる。書き言葉や話し言葉において複雑なテキストを理解したり産出したりするために必要な補助手段 (ノート、図表、マップ) が使える</u>) [態度・価値・倫理] 母語の能力 (<u>公で話す際の自信を持つ</u>)
	⑤コラボレーション	[技能] 他者と効果的に相互作用する (<u>聴衆と目的を意識して明快に話す</u>)
働くためのツール	⑥情報リテラシー	[技能] 情報を活用し管理する (<u>複雑な情報をつくり出し、提示し、理解するために、プレゼンテーション、グラフ、図表、マップを利用する能力。聞く、話す、読む、書くときに、関係のある情報と無関係な情報を区別する能力</u>)
	⑦ICTリテラシー	[技能] 情報を活用し管理する (<u>コミュニケーション、検索、プレゼンテーション、モダリティのために、ICTやメディアの応用に関する知識やスキルを利用する。</u>) 効果的にテクノロジーを適用する (<u>情報を調査、整理、評価、伝達する手段としてテクノロジーを利用する</u>)

図3のKSAVEモデルに含まれるスキルそれぞれについて、前述のようにパブリックスピーキングとの関連を見たところ、いくつかの項目が抽出された。表1のコミュニケーションスキルから抽出されたパブリックスピーキングに関連した能力も含めてまとめたのが、表2である。パブリックスピーキングに特に関連を持つと思われる部分に下線を付した。

表2にある項目を検討してみると、パブリックスピーキングに関連する21世紀型スキルの項目として挙げられることとして、まず、知識としては、話し言葉に様々なジャンルがあることを認識し、さらに言語の機能として非言語的な機能を理解することや、話し言葉の持つ社会的あるいは文化的な多様性について理解することが重視されている。そして、母語に関しては公で話す際に自信のある態度を持てるようにすることも重視されていることがわかる。パブリックスピーキングの技能面での能力も多く求められる。まず、自分自身の考えを説明し、他者に対して効果的に伝えるための技能が必要とされる。具体的には、簡潔で正確に話すこと、他者の視点を取り入れて説得力を持った話し方をするのが挙げられ、さらに、ビジュアルエイドなどの補助手段を使うためのICTの知識が使いこなせることも挙げられている。この中で特徴的なのは、他者との交流が重視され、そのために他者の視点を話す際に取り入れることなどを通して、他者に効果的に伝えることを重要視していることである。公の場で話す際にも、他者を意識し、説得的に話すことが求められていることがわかる。

Ⅲ. 先行研究

グローバル化が進む社会において、パブリックスピーキングが不可欠なスキルであることは疑いなく、これについて述べた著作や論考は非常に多い。もともと2009年のオバマ大統領の就任演説が熱狂的に世界の人々に受け入れられたり、TED (Technology Entertainment Design) が主催する会議での様々な分野で活躍する人々のプレゼンテーションTED Talk^⑧が大きく取り上げられたりしたところに、日本のオリンピック誘致のための滝川クリステル氏による「おもてなし」プレゼンテーション^⑩が話題となり、人々の関心が集まるようになってきている。

このような時代に、東(2014)は日本の「ウチ」と「ソト」の概念を使いながら、ウチの世界にとどまるコミュニケーション方法はもはや成り立たず、ソトに向かって公的な場面で新たな人間関係を築き発展させていけるような、「公的言語」のトレーニングが必要であると指摘している。

日本語教育と21世紀型スキルなどとの関連を述べた論考は、特に海外での日本語教

育における実践報告にいくつか見られる。加藤(2011)は、中国大連市での第二外国語教育としての日本語教育を、国際都市でもあり日本との交流が盛んな大連市において、「言語・知識・情報・技術を活用する力」、「多文化共生社会において様々な背景を持つ他者と付き合う力」、「社会の一員として自律的に活動する力」という3つのキー・コンピテンシーを日本語教育の枠組みに設定していくことが重要であり、この理念をもとに日本語教科書を開発したことを報告している。中尾(2016)は、21世紀型スキルの育成が重視されているタイにおける中等教育で、どのように日本語教育に取り入れるかを、実際にタイ人の日本語教師に理解し経験してもらうために「日本語教師キャンプ」を実施したことを紹介している。

一方で、パブリックスピーキングを21世紀型スキルなどに代表される新しい時代に必要とされる技能とを関連づけて論じた研究というのは、まだあまりない。

日本語教育におけるパブリックスピーキングと21世紀型スキルなどとの関連については、深澤他(2015)で、知識基盤社会である昨今では、新しい情報や知識を他者に伝えることが特に不可欠なスキルであることに触れている。また藤他(2016)は、韓国における大学生ディベート大会の実施や指導について報告しているが、ディベートを指導することの効果として、21世紀型スキルや社会人基礎力が養成されることを挙げている。

現在はまだ、パブリックスピーキング技能を21世紀に必要な学びの1つとして積極的にとらえて教育現場で実践している例はそれほど多くないため、論考も少ないが、今後は、世界の教育の内容自体が大きく変化してくる中で、パブリックスピーキング技能はますます不可欠なものとして認められるようになるであろうと思われる。

IV. 21世紀に必要な学びとしてのパブリックスピーキング ビブリオバトルを例として

1. 研究の目的と概要

本研究では、日本語教育に「ビブリオバトル」と呼ばれる書評ゲームを取り入れたパブリックスピーキング技能養成の実践を取り上げ、21世紀型スキルの育成がどう実現するかを検証していく。

ビブリオバトルというのは、自分が人に勧めたいと思う本を持ち寄り、5分間のスピーチを行った後、参加者による投票で「チャンプ本」を決める書評ゲームを指す。最近、書店や図書館のイベントのみならず、教育現場でも取り入れる例が増えており、急速に普及している。日本語教育では、山路他(2013)が留学生に対する日本語授業

に導入し、実際に外国人留学生によって行われたスピーチやアンケート調査の分析から、ビブリオバトルが留学生の日本語学習のモチベーション強化に効果があり、かつ話し手として聴衆の理解を深めながら話すことの重要性を意識させるのに役立ったと報告している。このように、ビブリオバトルが広く普及してきた背景には、開催に面倒な準備が必要なく、話し手と聞き手の双方が積極的に関わり楽しんで実施できること、その割に学習効果も大きいことが理由だと思われる。

本研究でも、実際に日本語学習者である外国人留学生対象の大学共通教育での日本語科目でのビブリオバトルのスピーチおよび質疑応答場面でのデータを用い、IIの5.で見た21世紀型スキルとパブリックスピーキング能力との関係という視点で、その特徴や重要性を探っていくことにする。

具体的には、ビブリオバトルのスピーチ準備および実施でどのような学びが実現されるのかを検討し、さらに、行われたスピーチで実際に話された内容も合わせて見ながら、考察する。さらに、ビブリオバトルでは、スピーチ後に数分の質疑応答を行うことになっているが、そこで話し手と聞き手がどのようなコミュニケーションを行っているかも検証する。それらを総合して、パブリックスピーキングにおけるビブリオバトルが21世紀型スキルとどう関係するのかを考察する。

2. 分析手法と使用データ

分析の手法としては、留学生がビブリオバトルで日本語によるスピーチを実際に行うプロセスを、1)スピーチ準備、2)スピーチ実施、3)スピーチ後の質疑応答の3つに分け、それぞれ、21世紀型スキルの中で、どのようなスキル育成につながるかを検討した。研究のデータとして使用したのは、2014年と2015年の2年に渡って、ある国立大学の外国人留学生対象の共通教育の日本語科目の授業中に行われたビブリオバトルでの日本語スピーチ29本と、スピーチ後に行われた質疑応答部分の文字化資料である(以下、留学生データと略記)¹¹⁾。

ここに参加している留学生は、大学学部レベルの正規留学生であり、日本語力はN1およびN2レベルである。そしてビブリオバトルで紹介する本として選ぶのは、日本語の本に限らず留学生の母国のものや翻訳書、さらには漫画などでも構わないとした。また、ビブリオバトルの公式ルール¹²⁾に従い、本の表紙等以外のビジュアルエイドは使わず、資料配布やスライドの提示などは行わないこととした。

3. 分析結果と考察

ここから、前述したビブリオバトルに参加する際に経験する3つの場面にしたがっ

て、分析を進める。

3.1 ビブリオバトルのスピーチ準備の段階で必要なスキル

ビブリオバトルに参加するためにまず必要なのは、言うまでもなく、紹介する本を選定することである。自分がこれまでに読んだ本を回想し、さらには図書館に行ったりインターネットで調べたりしながら、本の内容を確認することになる。これは、IIの図3で見たKSAVEモデルの中では、「思考の方法」全般に関係し、「働くためのツール」の1つであるICTリテラシーも必要となる。

そして紹介する本の選定後には、この本の客観的な情報に、自分自身のこの本にまつわる経験や思いを加え再構成し、聞き手にこの本を勧める理由を考える。この部分は、「思考の方法」の技能に該当する。知識だけではなく、それを元に新しいアイデアを創造することが求められているからである。さらにスピーチ準備の段階には、前述の表2に示した「思考の方法」における「創造的な活動を改善して最大限に高めるために、自分自身のアイデアを詳しく説明し、洗練し、分析し、評価できるようになり」、かつ「他者に対して効果的に、新しいアイデアをつくったり、実行したり、伝えたりする」ことも必要なスキルとなる。つまり、21世紀型スキルの理念では、新しく考えたアイデアは常に他者を意識したものでなければならないことになるが、ビブリオバトルのスピーチを準備する際には聞き手の反応を想定して説得的に話すことが求められ、21世紀型スキルとして必要な項目と合致するのである。

留学生によるビブリオバトルのスピーチ作成において特徴的な事項として、外国語でスピーチを行うということが挙げられる。KSAVEモデルでは、「働く方法」のコミュニケーションの中に、母語と外国語でのコミュニケーションが取り上げられている。ここには母語や母語以外の外国語の知識や技能を持つことが重視されているのはもちろんだが、表1の説明でも触れたように、話し言葉には様々な種類がある、ということが述べられている。ビブリオバトルでのスピーチは、聞き手に対して説得的に話をして、取り上げた本を読みたいと思わせることが求められるので、学会のアカデミックプレゼンテーションとも、また他のジャンルの挨拶スピーチなども性質が異なるものであり、それを理解して、話す内容を決めて原稿を考えなければならない。これは、21世紀型スキルで重視されていることと重なると言える。

3.2 ビブリオバトルのスピーチ実施の段階で必要なスキル

ビブリオバトルにおいて行うスピーチの目的は、自分のいわゆるお勧め本の概要と、なぜ勧めたいかの理由を述べ、最終的に聞き手に読みたいと思わせることである。こ

それは、同じパブリックスピーキングに含まれるジャンルであっても、スピーチコンテストなどとはやや目的が違ってくる。たとえば、毎年開催されている「外国人による弁論大会」¹¹³の審査基準として、主題の良否、事例の適切さ、内容の構成、語句の使い方、話し方の5項目を中心に審査員が審査するとある¹¹⁴。おそらくこれらの5つの項目のバランスが取れているスピーチが最優秀賞に選ばれることになるのであろう。しかしビブリオバトルでは、どんなに主題や事例がよく、話し方も正確で聞きやすいものであるとしても、聞き手への説得が成功しなければ、チャンプ本にはなれない。

説得力のあるスピーチがどのようなものを指すのか、簡単には言えないことである。しかし「説得」が聞き手に対して何らかの効果を持つことだとすると、自分のお勧め本の内容を一方的に説明したり、長々と引用したりするだけでは、聞き手に対して効果を持つとは言い難い。このことについて、前述した留学生データを見てみると、以下のようなことがわかった。

29本の留学生データは、2014年および2015年に各2回ずつ、計4回ビブリオバトルを行なった際のものであり、この中には、投票でチャンプ本に選ばれたスピーチが4本、また次点に選ばれたスピーチも5本が含まれている¹¹⁵。チャンプ本および次点本(以下、合わせてチャンプ本と呼ぶ)スピーチとそれ以外(非チャンプ本と呼ぶ)のスピーチを比較した際、スピーチの導入部分に聞き手への問いかけが、チャンプ本スピーチには全体の67%に見られ、非チャンプ本スピーチには33%しか見られなかった。非チャンプ本スピーチでは、最初から、自分のお勧め本の説明やストーリーなどを一方的に長々と話している例が多かった。以下に、例を挙げる¹¹⁶。

例1)・・・えーと、風刺の小説に(筆者注:発話ママ)紹介したいと思います。

えーと、まず、あの、皆さんはこの本を読んだことがありますか?

(データ番号14107)

例2)えと、私が本格的にこの本をお勧めする理由を説明する前に、端的に、えーと、あらすじと背景、この小説のあらすじと背景について触れたいと思います。

えーと、この小説の背景は・・・(筆者注:この後も説明が続く)。

(データ番号14206)

どちらの例も、書名などを説明した後の発話であるが、チャンプ本スピーチの例1)では「読んだことがありますか」と問いかけることで、聞き手への働きかけを行なっているが、非チャンプ本スピーチに含まれる例2)では、本の内容の説明をずっと続けているだけで、一方的なスピーチの印象を持たれる可能性がある。

例3) えっと、教育が(筆者注:発話ママ)、教育とは何ですか。自由とは何ですか。そしては(筆者注:発話ママ)それを奪ってしまう戦争とは何ですか。

(データ番号15210)

例3)は、チャンプ本スピーチの1つで、導入部ではなく、スピーチの終了近い部分で問いかけをしている例である。聞き手に曇り掛けるように問いかけを3回繰り返しており、働きかけの印象が強く感じられたであろうと思われる。

ここにも、KSAVEの「思考の方法」における「創造的な活動を改善して最大限に高めるために、自分自身のアイデアを詳しく説明し、洗練し、分析し、評価できるようになる」スキルと、かつ「他者に対して効果的に、新しいアイデアをつくったり、実行したり、伝えたりする」スキルが問われる活動であることが見てとれる。さらには、「働く方法」の「コミュニケーション」において、「他者の視点を取り入れて説得力を持つ議論をすることができる」という項目や「コラボレーション」において「聴衆と目的を意識して明快に話す」のスキルも、ビブリオバトルのスピーチをすることで強く意識し、養成されることになると言える。

以上、見てきたようにビブリオバトルでは、発表時には口頭によるスピーチのみで、ICTなどは基本的には使用しないことになっているが、それ以外の活動については、表2でKSAVEモデルとパブリックスピーキングとの関連をまとめた内容のすべてが該当し、21世紀型スキルの養成と大きく関わるということがわかる。

3.3 ビブリオバトルのスピーチ後の質疑応答の段階に必要なスキル

ビブリオバトルでは、スピーチ後に質疑応答が行われることになっている。パブリックスピーキングの中でたとえばアカデミックプレゼンテーションのように質疑応答も重視されることもあるが、他のジャンルの場合では、話した後に必ずしも質疑応答があるとは限らない。ビブリオバトルでの特徴は、質疑応答で聞き手と直接やりとりしたことが、後のチャンプ本決定への投票に影響を与える可能性が強いということである。

例4)は、チャンプ本スピーチの1つで、効果的な勉強の仕方のマニュアル的な内容の本について話した後の質疑応答である。実際に使ってみて効果が出たのかという質問に対して、発表者は回答に、実際に使った方法を取り上げて説明している。この質疑応答が、ただ根拠なくこの本を勧めているのではないという証拠にもなり、このスピーチに説得力を持たせ、投票結果でよい結果を得たと思われる。

例4)

(質問者) えっと、じゃあ何か、本に書かれた、が³、方法を使ってどんな結果がで、出ましたか？

(発表者) それは結構いい方法、いい結果と思いました。たとえば今、私が取っているのは・・・(筆者注：方法の具体的な説明が続く)。 (データ番号1402)

下の例5) もチャンプ本になったスピーチでの質疑応答である。日本社会の特徴を考察した名著と言われる本を取り上げているが³、その中で、現代の日本はここに書かれていることと少し異なっていると述べたのに対して、聞き手の1人が質問している例である。それを受けて、若者の態度は本に描かれている日本人の姿と違っているが³、質問者にも、まわりの日本人を観察して違っている点があったら紹介するようにと応じると、質問者が「すごい難しいです」と返している。単に質問に答えるだけでなく、さらに質問者とのやりとりを広げたことで、このスピーチの印象が強まり、チャンプ本への得票につながった可能性がある。

例5)

(質問者) ○さん(筆者注：発表者の名前)が実際に日本に来て、ちょっと本の中に書いた通りでなかったなど、日本人は少し変わったなどおっしゃったのですよね。あの一、具体的にどういう感じで変わりましたか。その、どう思っ

(発表者) この本はちょっと古いですが、あの一、第二次世界大戦で、あの一、作者は日本の社会に観察していきました。でも、今の日本社会はやっぱり平和中ですから、みんなの考え方、特に若者たちの世界はちょっと昔の日本人とちょっと違うかなと思います。もし何か、△さん(筆者注：質問者の名前)はすごいと思いますが、あの一、もし興味があれば、今の日本の若者の心理の世界を観察して、あの一、新しい方を私たちに紹介・・・

(質問者) すごい難しいです(笑)。 (データ番号：1506)

これらの2つの例で見られるのは、KSAVモデルの「思考の方法」における「創造とイノベーション」の「他者に対して効果的に、新しいアイデアをつくったり、実行したり、伝えたりする」や、「仕事の方法」における「コラボレーション・チームワーク」の「他者と効果的に相互作用する」に該当する。ピブリオバトルのスピーチそのものだけでなく、質疑応答部分も、チャンプ本決定に加えて、21世紀型スキル養成にとっての重要性があることがわかる。

3.4 ビブリオバトルの聞き手に求められるスキル

言語教育の場におけるパブリックスピーキングの活動で問題になるのは、話し手としての学びが大きい一方で、聞き手としての役割を認めにくいところである。たとえば留学生のための日本語授業において、自分の専門内容を日本語で説明するプレゼンテーションをさせることがある。学会や研究発表会などでの日本語による学術発表に備えるためである。この活動では、話し手としては懸命に準備をして発表を行うが、聞き手としては、自分の専門と異なる専門分野の発表内容を理解するというモチベーションを持ってないまま、ぼんやりと他の学生のプレゼンテーションを聞いていることが多い。山路他(2013)によると、ビブリオバトルでは、すべてのスピーチを聞いた後に「チャンプ本」を決定するための投票を行うという仕組みのために、聞き手としての権利と責任が生じ、聞き手の態度に変化がもたらされているという。

そのことがよくわかる例を以下に挙げてみる。例6)は非チャンプ本スピーチの質疑応答の部分である。スピーチで発表者はずっと自分が勧める推理小説のストーリーを延々と引用した。そのため冗長なスピーチになってしまい、チャンプ本に選ばれることはなかったが、質疑応答で1人の質問者は、そのストーリーを確認するような質問をしている。

例6)

(質問者) あの一、内容の理解がよくできなかったんですが、□という人物がお母さんと娘をかばうため、1人を殺しましたね。

(発表者) はい、そうです。

(質問者) その1人は誰ですか。

(発表者) あの、あの、もう1人は、あの一、あの一、存在感がない×です。

(データ番号1403)

ここでは、上述したようにスピーチの冗長さにもかかわらず、質問者は集中してスピーチを聞いていたことが窺われる。

これらの例は、KSAVモデルの中では、「働く方法」コラボレーションの中にある[態度]の「他者と効果的に交流する」に該当する。この項目の特徴は、「いつ聞いたり、話したりするのが適切かを知る」とあり、話し手として聴衆を意識して明快に話すという項目の他に、「注意深く、忍耐強く、誠実に聞く」という項目が掲げられていることである。聞き手としての態度にも言及し、相互的な交流になることの重要性に触れていることが大きい特徴であると言えるが、ビブリオバトルの仕組みには、聞き

手の役割が明確にあり、それはこの KSAV モデルとも合致するのである。

V. おわりに

現代社会で求められる教育は、従来の内容と大きく変化し、学習者が単なる知識や技能だけを獲得しても大きく急速な変化には対応しきれない。そのためにも、獲得した知識や技能から、他者との協働を通して、新しい知識を創造していくことが今まで以上に求められている。本稿で見てきたパブリックスピーキングの中でもビブリオバトルの活動は、準備の段階では、思考の方法や ICT の利用などのスキルも必要になり、さらにビブリオバトル実行の段階では、話し手聞き手とも、自分の考えを他者に伝えることとともに、相手の話をよく聞き、かつ、相互的に交流しながら、理解を促進していく様子が明らかになった。

これらのことから、21世紀の日本語教育には、これまで以上に、相互的なコミュニケーションが求められ、さらにはコラボレーションが求められることがわかる。そのため有効な方法として、パブリックスピーキングの指導は欠かせないことが言え、さらには本稿で取り上げたビブリオバトルのように、話し手と聞き手が積極的に交流する仕掛けを組み込んでいくことで、ますます効果が上がる可能性があることもわかった。

日本語教育の教育理念にはこれまでも大きいパラダイムシフトがあったと言われていた。教育内容重視の文法訳読法、オーディオリンガルアプローチの時代から、コミュニケーション重視のコミュニカティブアプローチが全盛となり、現在は、社会的成員としての学習者を重視する自律学習重視の時代へと変化している(佐々木2006)。さらに今後は、外国人のための日本語教育も、21世紀を生き抜くための能力の1つとはっきりとらえ、意識しながら指導内容を検討していくことが重要であるということであろう。

【注】

- 1 金沢大学人間社会学域 国際学類 日本・日本語教育コース教授
- 2 日本語のパブリックスピーキングを、ヒルマン小林・深澤(2009)の「ある程度改まった場所で、一人の話し手が対象となる複数の聴衆に、自分の責任において自分の考えを論理的にまとめて伝えようとすること」の定義を採用し、議論を進めていく。
- 3 平成17年中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像(答申)」による。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm (2016年10月14日アクセス)

- 4 OECD (経済協力開発機構) は, 世界経済を協議するために1948年に設立された国際機構で, 現在の加盟国は日本を含む34カ国である。
- 5 ICT (Information and Communications Technology : 情報通信技術) は, IT と同義語であるが³, 最近よく用いられるようになってきている。
- 6 グリフィン他 (2014) および ATC21S のウェブサイトを参考に作成 <http://www.atc21s.org/>
- 7 グリフィン他 (2014) および ATC21S のウェブサイトを参考に作成 <http://www.atc21s.org/>
- 8 グリフィン他 (2014) および ATC21S のウェブサイトを参考に作成 <http://www.atc21s.org/>
- 9 プレゼンテーションは動画で配信されている。<http://www.ted.com/talks> また, NHK では, 「スーパープレゼンテーション」という番組で, これらのプレゼンテーションを取り上げ, 解説を加えている。
<http://www4.nhk.or.jp/superpresentation/>
- 10 動画が配信されている。<https://www.youtube.com/watch?v=kInQ5ijrSGg>
- 11 授業で行われたビブリオバトルは, 参加留学生の同意を得た上で, 録音録画したものを文字化している。
- 12 ビブリオバトル公式ルールは, 公式サイトに掲載されている。
- 13 「外国人による日本語弁論大会」は一般財団法人国際教育振興会が1960年から毎年開催しているもので, 現在は, 国際交流基金とともに, 主催している。NHK でテレビ放映もされている。
- 14 一般財団法人国際教育振興会の WEB サイトに掲載されている実施要領による。
- 15 実際のビブリオバトルでは, 「チャンプ本」のみが選ばれるが, 今回の研究では, 比較を重視するため, 票数で次点になったスピーチを「次点本」として取り上げることにする。
- 16 なお, 例は留学生データを文字起こししたもので, 内容をわかりやすくするために, 漢字仮名交じり文を採用している。基本的には, 発話になるべく忠実に文字化してあり, 「。」は短いポーズ, 「。」は文の終わり, 「・・・」は省略部分を示している。

【付記】

本研究は, 平成25年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「グローバル化時代の自己表現のための日本語パブリックスピーキングに関する研究」代表者: 深澤のぞみ, 番号: 25370585) の助成を受けた。

【参考文献】

- 東照二 (2014) 「なぜ, あの人の話に耳を傾けてしまうのか? 「公的言語」トレーニング, 光文社新書
- 加藤睦人 (2011) 「多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育 – 中国大連市における第二外国語としての日本語教育–」『文学部紀要』24 (2), pp.1-21
- グリフィン, P.・B. マクゴー& E. ケア編 (三宅なほみ監訳) (2014) 『21世紀型スキルー学びと評価の新たなかたち』北大路書店
- 佐々木倫子 (2006) 「パラダイムシフト再考」『日本語教育の新たな文脈』アルク
- 中尾有岐 (2016) 「21世紀型スキル育成を目指した学習者体験型教師研修 – タイ人中等教育教師の気づきと学び–」『国際交流基金日本語教育紀要』第12号, pp.41-56
- ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ (2009) 「日本語のビジネススピーチの特徴と日本語教育への活用の可能性」『JSAA-ICJLE2009 日本語教育国際研究大会予稿集 (オーストラリア ニューサウスウェールズ大学)』p.123
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子 (2011) 「日本語教科書における口頭発表指導について–日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究–」『金沢大学留学生センター紀要』第14号, pp.29-42

- 深澤のぞみ・山路奈保子・須藤秀紹 (2015) 「外国語教育におけるビブリオバトルと「説得」計測自動制御学会 システム・情報部門学術講演会2015 ポスター発表
- 藤美帆・諏訪昭宏・鈴木啓孝・岩崎浩与司 「海外における日本語関連行事のこれからについて -韓国における大学生ディベート大会の活動実践を例に-」 『2016年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.41-51
- 松尾知明 (2015) 『21世紀型スキルとは何か コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』 明石書店
- 山路奈保子・須藤秀紹・李セロン (2013) 「書評ゲーム『ビブリオバトル』導入の試み-パブリックスピーキング技能育成のために-」 『日本語教育』 155号, pp.175-188

【参考ウェブサイト】

Assessment and Teaching of Twenty-First Skills Project (ATC21S)

<http://www.atc21s.org/> (2016年10月アクセス)

一般財団法人国際教育振興会

http://www.iec-nichibei.or.jp/iec04_2.html (2017年1月アクセス)

国際団体 P21 (PARTNERSHIP FOR 21ST CENTURY LEARNING)

<http://www.p21.org> (2017年1月アクセス)

ビブリオバトル公式サイト <http://www.bibliobattle.jp/> (2017年1月アクセス)

文部科学省 「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/_icsFiles/afieldfile/2011/04/28/1305484_01_1.pdf (2017年1月アクセス)

文部科学省 個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について (答申) (中教審第193号)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/07/07/1371833_1.pdf (2017年1月アクセス)

Public Speaking in Japanese Language Education as a Necessary Skill in the 21st Century

Nozomi Fukasawa

Abstract

This paper analyses the activities of “Biblio Battle” to clarify whether they contribute to improving public speaking skills, which are a necessary requirement for people living in the 21st century. Biblio Battle is a social activity in which participants compete by presenting book reviews, and it is considered a genre of public speaking. In recent years, universities too have begun to emphasize on the development of skills necessary for learners to live and work in today's world, and Japanese language education for international students in universities is no exception. The results of the research confirmed that activities such as Biblio Battle enhance the skills associated with 21st-century skills. The results also indicated that international students acquire essential learning skills when they are taught public speaking.